

昭和四十四年度

秋季公開講演会要旨

無量寿経における自然の意義

本学教授 松原祐善

浄土真宗の正依の經典である『仏説無量寿経』（魏訳）には自然の語が特に目立って多いことは周知の通りである。上・下二巻を通じて五十四箇ほど数えることができる。そしてそのうち二十四箇は下巻の「悲化段」（三毒・五悪段）の教説のなかに見出すことができる。しかもこの「悲化段」の教説において、自然の意義はまず真如法性とか無上涅槃という仏教の証りそのものを表現し、またかかる宗教的自覚に裏づけられて、自然はあくまでも自由自主の主体性の確立の意義を荷っている。もとより自然とは「おのずからしからしむる」の義であって、日本では明治のはじめに西洋語のネイチュアの訳語に採用されて以来、自然とは自己に対する客観的外界的存在として、主客相對の世界で考えられているが、そのことは東洋思想の最も大切な根本的ものを忘れ去らしめる事由となっているのである。われわれには自然と自己とは同根一体であり、天地自然と歴史とは一と続きのもの、一如一体のものと直覚されているのである。

ところで『無量寿経』（魏訳）下巻の「悲化段」の教説につい

ては、他の異訳本の『無量寿如来会』（唐訳）『無量寿莊嚴経』（宋訳）をはじめ、現在の「梵本」や「西蔵本」にはこの「悲化段」（三毒・五悪段）の教説を欠いているのである。しかもこの一段の教説の用語の上には特に中国の道教の影響をうけるものが多いために、この『無量寿経』（魏訳）の翻譯の際に、この一段の教説が中国人によって添加されたものであると主張される専門のシナ学者が多いのである。またインド学の立場よりも既に現存の「梵本」や「西蔵本」にこれを欠き、「唐訳」や「宋訳」にもこれを欠くことより、恐らくは「魏訳」の原本にもこの「悲化段」の教説はなかったものと推察されている。そればかりでなく、自然の用語にしても「魏訳」の五十四箇が「唐訳」になれば僅かに七箇となり、「宋訳」になれば皆無となり、「梵本」や「西蔵本」ではその自然の原語を見出すことができないために、中国人によって加えられたあたかも偽経のごとくに取り扱わんとされているのである。しかしこの「悲化段」の内容は「魏訳」の翻譯に先立ちて「初期無量寿経」とも呼ばれている二十四願経の『無量清淨平等覚経』（漢訳）や『大阿弥陀経』（呉訳）において、最も重要な位置にそれが説かれているのである。しかも「魏訳」には「嘆仏偈」をはじめとして、処々に「漢訳」からの整文翻譯が見られるのである。特にこの「悲化段」の教説は「漢訳」や「呉訳」の兩訳の本文を整文改修せるものであるとの説が有力であるが、たとえ整文改修のものであっても、その「悲化段」の箇所が必ずしも「魏訳」の原本になかったものであるとすることは断言できないことである。しかも「呉訳」や「漢訳」の兩訳に

おけるこの一段と、いま「魏訳」におかれてあるこの「悲化段」の教説の意味が、全く異質的とまで思われるほどに、その意味内容において前者の道徳を主とせるに對して後者との間には次元の浅深すら視られるのである。而して「魏訳」の自然の用語も恐らくは『無量清淨平等覺經』（この經には自然の語は一七七箇）より流入せるものと思われるが、その意味内容は全く深化されてきているのである。而してこの自然の用語につきてはシナ学者の指摘するごとく、いずれも老莊思想の「無為自然」の語に由来するものに相違ないと思われる。これ等の經典の翻譯される三世紀、四世紀のはじめにかけては、中国では老莊思想の全盛期であつたともいわれ、また印度の大乗經典を中国人に翻譯理解させるためには、老莊の用語が使用されることはやむを得ざることであり、また当然のことと思われる。仏教の涅槃のごときは中国では到底その訳語を見出し得ない仏教独自の用語であるが、『無量壽經』では滅とか滅度の訳語を使用しながら、また無為自然の用語をあてられているのである。無論そこには老莊の平面的な無為自然に對して、無為涅槃界として、宗教的に淨土の彼岸性の意義にまで深めているのである。かくして『無量壽經』における「悲化段」の教説を中心に、この經の上下二卷にわたり、自然の語を広く拾つてみると、この一自然に凡そ三種の意義を含蓄せることを從來とも眞宗学者は指摘してきているのである。その三種の意義とは

① 無為自然

まず「悲化段」において

無為自然、次泥洹之道。(三毒段)
 彼仏國土無為自然、皆積衆善、無三毛髮之惡。(五惡段)
 令下獲三德、昇中無為之安。(五惡段)

の文が見出されることであるが、『無量壽經』上卷では特に淨土莊嚴を説くなかに

自然音樂、自然苑廂、自然相和、自然合成、自然万種技樂、自然化成、自然灌身、自然隨意、自然妙声、自然快樂之音、自然之物、自然在前、自然盈滿、自然飽足、自然虛無之身無極體、自然德風、自然風起、自然供養、自然化生等、
 多く見出されることである。

② 業道自然

これは主として「悲化段」の教説のなかに見出されるのである。その例は

人在世間愛欲中、独生独死独去独来、当行至趣苦業之地、身自当之、無有代者。善惡變化、殃福異処、宿予敵待、当三独趣入、遠到他所、莫能見者。善惡自然、追行所生。窃々冥々、別離久長、道路不同、会见無期、甚難復得相值。(三毒段)

違逆天地、不從人心、自然非惡先隨、與之。恣聽三所為、待其罪極。其寿未尺便頓奪之。下入惡道、累世勤苦。(三毒段)

罪報自然、無從捨離。但得前行、入二火燒。身心摧碎、精神痛苦。当三斯之時、悔復何及。天道自然、不令得蹉跌。故有自然三塗無量苦惱。展三轉其中、世世累劫、無有出期。難得解脱。

脱、痛不可言。(五惡段)

善惡報応禍福相承、身自當之、無誰代者。數之自然。応其所行二殃、咎追レ命、無得ニ縱捨。善人行レ善、從レ樂入樂、從レ明入明。惡人行レ惡、從レ苦入苦、從レ眞入眞、誰能知者。独仏知耳。(五惡段)

③ 願力自然

「悲化段」の左の経文に見出される。
 必得ニ超絶去、往三生安養國。横截三五惡趣、惡趣自然閉昇。道無窮極。易往而無レ人。其國不逆違自然所レ牽。何不棄二世事、動行求道徳。

親鸞聖人は『尊号真像銘文』にこの文を解釈して

「横截五惡趣惡趣自然閉といふは、横はよこさまといふ。よこさまといふは如来の願力を信るすゆへに行者のはからいにあらず、五惡趣を自然にたちすて四生をはなるるを横といふ。他力とまふすなり。これを横超といふなり。横は豎に對することばなり。超は迂に對することばなり。豎はたてさま、迂はめぐるなり。豎と迂は自力聖道のところなり。横超はすなはち他力真宗の本意なり。截といふはきるといふ。五惡趣のきづなをよこさまにきるなり。惡趣自然閉といふは、願力に帰命すれば五道の生死をとづるゆへに自然閉といふ、閉はとづといふなり。本願の業因にひかれて自然にむまるるなり。昇道無窮極といふは、昇はのぼるといふ、のぼるといふは無上涅槃にいたる、こ

れを昇るといふなり。道は大涅槃道なり。無窮極といふは、きはまりなしとなり。易往而無人といふは、易往はゆきやすしとなり。本願力に乗ずれば、本願の実報上にむまるることうたがいなければ、ゆきやすきなり。無人といふはひとなしといふ。人なしといふは真実信心の人はありがたきゆへに、実報土にむまるる人まれなりとなり。しかれば源信和尚は報土にむまるる人はおほからず、化土にむまるる人はすくなくらずとのたまへり。其國不逆違自然之所牽といふは、其國はそのくにといふ、すなはち安養淨刹なり。不逆違はさかさまならずといふ、違はたがふといふなり。真実信をえたる人は大願業力のゆへにやすく無上大涅槃にのぼるにきはまりなしとのたまへるなり。しかれば自然之所牽とまふすなり。他力の至心信樂の業因の自然にひくなり。これを牽といふなり。自然といふは行者のはからひにあらずとなり」

と領解されている。願力の自然は聖人の「三証」である。かくて『無量寿経』において三自然を語ることに於いて、無為自然より願力自然を展開し、願力自然を以て業道自然を転滅して無為自然の大涅槃に入らしめられることである。この三自然の意義を明かにすることにより、単に老莊の語る人爲のはからいを離れておのずからしかるという無為自然に對し、無為法性の涅槃界をあらわして、超越的彼岸的意義が附与されてきたのである。聖人の『高僧和讃』(善導)のなかに

信は願より生ずれば

念仏成仏自然なり

自然はすなはち報土なり

証大涅槃うたがはず

とあるが、念仏によって成仏するは願力の自然によるものであり、自然はすなはち報土なりとは、願力成就の報土は無為自然の涅槃界であることをいわれるのである。善導大師の『法事讃』に無為自然につきて

「從レ仏逍遙^{シヤス} 歸^ルニ自然^ニ、自然^ハ即^シ是^レ彌陀^{ナリ}。」

とあり、また

「西方寂靜無為樂^ニ 畢竟逍遙^{シテ} 有無離^ク」

と述べられている。親鸞聖人の晩年の法語である「自然法兩章」には

「自然といふは、自はをのづからといふ、行者のはからひにあらず、然といふはしからむということばなり。しからしむといふは行者のはからひにあらず、如来のちかひにてあるがゆへに。法爾といふは、この如来のおむちかひなるがゆへに、しからしむるを法爾といふ。……自然といふはもとよりしからしむといふことばなり。弥陀の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひて、むかへむとはからはせたまひたるによりて、行者のよからむとも、あしからむともおもはぬを、自然とはまふすぞとききて候。ちかひのやうは無上仏にならしめむとちかひたまへるなり。無上仏とまふすは、かたちもなくまします。かたちのましまさぬゆへに自然とはまふすなり。かたちましますとしめすときには、無上涅槃とはまふさず。かたちまざぬやうをしらせむとて、はじめ

て弥陀仏とぞききならひて候。みだ仏は自然のやうをしらせむれうなり……」

とこたれている。よく味読さるべきものである。いま聖人が「自然法爾」と熟されてくるについで、法然上人の『和語燈』「諸人伝説の詞」のなかに

「法爾道理といふ事あり。ほのほはそらにのぼり、水はくだりさまにながる。菓子の中にすぎ物あり、あまき物あり。これらはみな法爾道理なり。阿弥陀はとけの本願は、名号をもて罪惡の衆生をみちびかんとかちかひ給たれば、ただ一向に念仏だにも申せば仏の来迎は法爾の道理にてうたがひなし」という法語のあることを想い起しておこうと思う。

かくして私は最後に道元禪師の禪の立場よりする自然の領解につき『正法眼藏』のなかより引文して、親鸞聖人の「願力自然」の領解に照らしたいと思うのである。まず道元禪師は莊子の自然説をきびしく批判しているのである。『正法眼藏』の「四禪比丘の卷」に

「莊子曰、貴賤苦樂、是非得失、皆是自然。この見すでに西國の自然見の外道の流類なり、貴賤苦樂、是非得失、みなこれ善惡業の感ずるところなり。滿業・引業をしらず、過去來世をあきらめざるがゆゑに、現在にくらし、いかでかひとしからん。」と述べている。老莊の自然説はインドの外道の自然説とともに因果を撥無する実体論的宿命論として破せられているのである。既に中国にありて嘉祥大師吉蔵は『中觀論疏』卷第一末に

「從^ニ自然^ニ生^ズ者外道推^ス二求諸法。因義不^レ成故謂^ニ方法自然而生。

但解_二自然_一有_二三家_一。若如_二莊周所論明_一有_二之已生則不須_一生。無_二之未生復何能生_一。今言_レ生者自然爾耳。蓋是不_レ知_レ其所_二以然_一。謂_レ之自然。比明_レ自然有_レ因自然無_レ因。二者外道謂諸法無因而生名為_二自然_一。故經云。薊頭自尖飛鳥異_レ色。誰之所作。自然爾耳。」

とありて自然説に中国の莊子の自然説とインドの自然外道（無因外道）の二説あることを述べている。再び道元禪師にかえりて『正法眼蔵』の「身心学道の卷」に

「尽十方界是箇真人體なり、生死去來真人體なり。この身體をめぐらして、十悪をはなれ、八戒をたもち、三宝に帰依して捨家出家する真實の学道なり。このゆゑに真人體といふ。後学かならず自然見の外道に同ずることなかれ。百丈大智禪師のいはく、若執_二本清淨本解脫_一、自是仏、自是禪道、解_二者、即属_二自然外道_一。これらは閑家の破具にあらず、学道の積功累徳なり。時跳して玲瓏八面なり、脱落して如藤倚樹なり」

という法語を見出すことができる。更らに「諸悪莫作の卷」に「善悪因果をして修行せしむ。いはゆる因果を動ずるにあらず、造作するにあらず。因果、あるときはわれらをして修行せしむるなり。この因果の本來面目すでに分明なる、これ莫作な

り、無生なり、無常なり、不昧なり、不落なり、脱落なるがゆゑに」

と述べられて、かの百丈の不昧因果（因果歴然）にまた不落因果（因果超越）でもあることを主張されている。すなわち因果歴然のありのままが主体的な因果超越なのである。「大修行の卷」に「不落因果の道は墮野狐身なり。不昧因果の聞は脱野狐身なり。墮脱ありといへども、なほこれ野狐の因果なり。しかあるに古来いはく、不落因果は撥無因果に相似の道なるがゆゑ墮墮すといふところなり。たとい先百丈ちなみにありて不落因果と道取すとも、大修行の瞞佗不得なるあり、撥無因果なるべからず。またいはく、不昧因果は因果くかららずといふは、大修行は脱落の因果なるがゆゑに脱野狐身すといふ」

ここに因果のままに因果超越の法爾自然の境あることを思わしめられるのである。これに照らして親鸞聖人の願力自然は敢然たる業道の因果を包みて無為自然にいたらしむるとともに、業道自然のさながらに願力廻向の信を仰ぎ得て、業道流転の現實は不可称不可説不可思議の真如一実の功德宝海と転成し、自然法爾に、業道因果の繫縛を離れて自由自在の天地に逍遙せしめられるのである。